

はじめに

ここにちは。この本を手にしていただき、ありがとうございます。中田兼介なかたけんすけと申します。生き物を眺めているのが好きで、生き物を扱う学問のひとつ、生態学を教えて禄ろくを食はんでいます。お目にかかるて光榮です。

私が勤めているのは京都にある女子大で、学生の多くは特に生き物好きではなく、生き物にかかわる仕事をするつもりもなさそうです。すると、そんな彼女らに生態学を教えてどうなるの？という声がどこからか聞こえてきますが、気にしないようにしています。大事なのは、学んだことを人生のどこかで活かすこと。就職だけが人生ではないでしょ。

その点、生態学は活かしどころが多い学問です。生き物とかかわりのない人生なんてありえないからです。

私たちは人間関係のなかで暮らしていて、人間だって生き物なので、これだけで生き物とかかわりまくっています。これはさすがに牽強付会けんきょうふかいと言われそうなので置くとしても、実は私たち、知らず知らず多くの生き物と暮らしています。都市のなかにも多くの生き物がいて、

(アメリカの話ですが) ふつうの住宅でも調べてみれば、虫だけで何十種類も見つかるそうです。⁽¹⁾ 食べ物はすべて生き物ですし、私たちを取り巻く環境も、生き物なしには維持できません。それに今は、経済活動も生態系や生物多様性への配慮が必要です。意外と仕事に使えるかも。

生き物を知れば人間理解も進みます。人間のことだけ考えていると、内向き思考にハマってしまい、二進も三進もいかなくなることがあります。少なくとも私はそうです。そんなとき、人と違うようで同じでもある生き物を思い出し、その生き方を思考の物差し代わりにしてみると、ふつと視界が開けることがあります。

ですから、生態学の知恵をうまく使えば、より良く生きていくことができる。そう私は信じています。ということで午後の教壇に立つ私は、まどろみはじめる学生を見ながら「いつかのときまで今日の話を頭の片隅に置いておいてくれよなあ」と思っています。

この本は、そんな私が大学で話していることをつまみ食いして1冊にしたもののです。

生態学の対象は幅が広く、どんな種類の生き物も扱いますし、同じ場所でずっと観察した

り、国を超えて研究したり。1種類に集中する場合もあれば地域の生き物すべてが相手のこともあります。このすべてを1人でカバーするのはほとんど無理で、生態学の研究者の多くは何かしら自分の得意分野をもっています。私は動物の個体レベルの話が好きで、最近はもっぱらモノの行動を研究しています。それより大きな、たとえば生態系や地球環境の話などは、頭で理解してはいますが、自分の専門ど真ん中に比べると半可通です。それでこの本は、生態学の森羅万象を扱う体系的な教科書ではなく、私の興味関心に沿った、身近な生き物の話に重きを置いた構成になっています。

毛色が少し違うのは最終章で、最近私が夢中のコメづくりの話をします。私はサラリーマン家庭育ちで、ずっと市街地に住んでいますが、縁あって数年前に近所の小さな田んぼを借りることができました。決して学問のためではなく、ただ楽しいから（と、少しの職業的義務感から）始めたコメづくりですが、やってみると、そこには生態学のすべてが詰まっています。なにせ田んぼはひとつの生態系です。そこで、生態学の目で見た田んぼの経験をお話しして、苦手分野を補おうと思いついたわけです。学んだことがどこで活きてくるか、本当にわからないものですね。